

『主に招かれて立つ』 牧師 島田勝彦

マタイによる福音書第9章 35～38節

清水ヶ丘教会創立65年目に入りました。

1947年9月28日、日曜日、本町にある旧生糸検査所の二階会議室で、創立開所式礼拝が開催されました。

その前年の年明けから、エルンスト・ラング宣教師によって、「横浜ミッション診療所」と銘打った医療伝道が開始されていました。ラング先生は、海軍から復員され、蒲田で伝道開始されていた倉持芳雄牧師に協力を要請、文字通り二人三脚でこれを進められました。また関東学院三春台本校舎の三階礼拝堂や、横浜公園などで、「ユース・フォークライスト」と銘打った青年伝道が併行して実施されました。そこから、洗礼志願者が続出、教会設立に結ばれたのです。

生糸検査所での礼拝も五年間続きましたが、この南太田の地を与えられて、1952年4月20日より「清水ヶ丘教会」としての出発が始まったのです。五九年前のことです。

この時に当たり、マタイによる福音書九章のみことばが導かれました。ここにイエスさまの宣教のすべてが記されているからです。

「会堂で教え」

「御国の福音を宣べ伝え」

「あらゆる病気や患いをいやされた」

なぜなら、主イエスが目を挙げてみると、群衆はあたかも飼い主のいない羊のようであったからです。イエスさまはそのような群衆を見て、「深く憐れまれた」のです。

キリストの「憐れみ」とはキリストの「腹痛」、「疝痛(せんつう)」と言う本意です。それはイエスさまに始まったことではありません。神から遣わされた代々の預言者たちが味わい、経験した神の痛みでもありました。

ゲッセマネの祈りを経たキリストの十字架、ヨハネによる福音書 3:16 の中にもこの痛み、神のあわれみが証しされています。そこにこそ神の愛の発露があります。

「弟子たちに言われた。『収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるよう、収穫の主に願いなさい。』」(37～38)

主イエス・キリストが私たちを招かれる、私たちがそれに応えるということは、この神の愛から発する苦悶、キリストの疝痛を共に分かち合うことではないでしょうか。しかも、

その招きは一刻の猶予も赦され難い状況を暗示しています。「収穫」とは、その微妙さと難しさ、時を見分ける仕事、待つことのできない仕事、直ちに手をつけなければならない仕事だからです。ましてや収穫の多さが目の前にあれば、のんびりできません。

私たちはこの「収穫」に目を留めているのでしょうか。収穫にいそしむにも、何から手をつけていいかわからずに、いないのでしょうか。それどころかこれは自分の役割ではないと決め込んで、何もしていない、ということになってはいないでしょうか。

主の「あわれみ」、聖霊の「あわれみ」は、この収穫、救いを必要としている被造物に対する創造者の耐え難い心の苦しみです。迫りくる神の思いが発動されているのです。私たちは、この神の痛み、憐れみを取り次ぐ者として召されています。

「今やわたしは、あなたがたのために苦しむことを喜びとし、キリストの体である教会のために、キリストの苦しみの欠けたところを身をもって満たしています。」(コロサイ 1:24)

このパウロの言葉をどう聴きますか。

今イエスさまは教会をご自分のみ体としてお立てくださっています。パウロはそのために、このあと25節で、「教会に仕える者になっている」

と言っています。「教会に仕える」、言い換えれば「イエス・キリストに仕える」ことです。

イエス・キリストはご自分に仕える者を、命令ではなく、招いておられます。しかも神の国の収穫という喜びへの招きです。しかも、私たちをして、この招きに応えられる者と信任くださっている招きなのです。

新しい節目に、わたしたちは立っています。

主イエスの宣教の担い手として、イエスさまの肢体(からだ)になりましょう。

イエスさまが目標とされることを志しましょう。そのためには、聖日毎に神に立ち返り、神の国と神の義を第一に求めて生きることです。

イエスさまが愛されるように愛する心を持ちましょう。そのために祈りは不可欠です。他者を赦す心、受け容れる心は、自らを神のみ前に立たせてこそ可能となるからです。

イエスさまが働かれるように行動する手足になりましょう。その指針のすべては聖書に記されています。聖書を知識としてでなく聞いて行う者になることです。